

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13434

研究課題名（和文）中国・朝鮮半島・日本における書儀の普及と受容に関する比較研究

研究課題名（英文）Spread and Acceptance of Chinese epistolary style in China, Korea and Japan

研究代表者

山本 孝子 (YAMAMOTO, Takako)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：10746879

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：書儀は、手紙を書く際の参考に供するために編まれた模範文例集であり、従来中国儒教社会における伝統的な礼を反映するものとしてとらえられてきた。本課題においては、現存する各書儀が特定の時代・地域の文化・習俗を基盤として、それぞれに古代礼制を解釈し現実の礼秩序として示す点に着目し、時間・空間を超えて普及した書儀が、消化・吸収され、変容していく過程を追った。また、利用者が日常生活の中でどのように応用・実践していたのかについて考察を行った。各書儀が担った役割や歴史的な展開を明らかにし、その史料としての位置づけを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

書儀は唐から宋にかけての比較的短い期間に流行したものであり、これまでの研究においては共時資料として扱われることが多く、また単なる漢籍受容や語彙・表現の借入の問題として扱われてきたきらいがあった。本課題では、書儀を受け容れる側（個人/国・地域）の文化・土壌の違いに注目しながら、歴史的変遷をたどり、唐五代から宋にかけての各種書儀を位置づけ直した点に意義がある。書儀に加えて、その応用・実践例である手紙を利用し、書式を本来の姿に復元し、史料としての価値を「再発見」することができた。

研究成果の概要（英文）： Shuyi, or manual for etiquette in epistolary writing, is generally based on the traditional Confucian canon, which covers ancient rites, social forms and ceremonial occasions. In this subject, we focus on the fact that each extant Shuyi interprets traditional rituals and then shows people the ritual order based on the culture and customs of a specific period or region. We also followed the process of spreading across time and space and transformation of the letter writing, and considered how users applied Shuyi and practiced letter-writing in their daily lives. We clarified the role of Shuyi and its historical development, and showed its value as a historical material in understanding the social circumstances of the time it was written.

研究分野：敦煌学、文献学

キーワード：敦煌 書儀 手紙 東アジア

1. 研究開始当初の背景

書儀とは、唐から宋にかけて編纂が繰り返された手紙の模範文例集である。その中には、文章表現だけでなく、封緘方法や料紙の選択、届け方など手紙に関わる礼儀作法に関する記述も見られる。当時の社会関係を背景にした言語規範および儀礼の拠りどころとしての役割を担い、手紙を書く人と受け取る人の関係に応じた言葉遣いや形式を示している。

現存する書儀作品の大半は20世紀初頭に敦煌から発見されたもので、中原からもたらされたものもあれば、敦煌およびその周辺地域で編まれたものも含まれる。いずれも中国儒教社会における伝統的な礼を基盤としつつ、当時当地における実際の礼秩序を反映する。また、数や種類はそれほど多くないものの、中国の書儀は日本や朝鮮半島にも伝えられていた。古来、日本や朝鮮半島では「漢字」という共通の文字を媒体として、中国からさまざまな制度や文化を取り入れていた。書儀の受容もその一例であるとみなすことができるが、ここで問題となるのは、中国国内でさえも時代の変化や地域的特性、社会のニーズに応じて、内容やスタイルを変えながら、書儀の改編・生産が繰り返されていた点である。従前の研究では、単なる漢籍受容や語彙・表現の借入の問題として扱われることが多かったが、儒教文化の受容や内在的な発展・文化形成の土壌が異なる日本や朝鮮半島において、中国の特定の時代や地域の文化・習俗を基盤とする書儀がどのように受け容れられていたのか、改めて比較・検討する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、書儀の普及と受容の実態を、社会・文化的背景に着目しながら捉え直し、各地域・時代で起こった事象(手紙の書き方に関する礼儀作法の形成・展開、中国的礼儀作法の実践・応用方法など)を明らかにすることを目的とした。どのような書儀(あるいは書儀の内容の一部)がどれほどの範囲に伝えられていたのか、普及と受容の問題について、特に(1)空間的範囲、(2)時間的範囲、(3)階層別利用状況とその目的、の三点に重きを置いて考察を進め、書儀文献の資料としての位置づけを再確認し、その重要性を再評価することを目指した。

3. 研究の方法

本課題は研究代表者が単独で行った。「2. 研究の目的」にあげた三つのポイントについて、これまでの書儀研究の中核をなし、成果の蓄積のある敦煌写本書儀を活用し、それぞれ代表的/特徴的な資料と、比較・検討するという方法を採用した。

(1)空間的範囲については、敦煌・トルファン以西における書儀の普及に関する資料として、ペリオ蒐集クチャ・ドルドルオコル発見文書についてフランス国立図書館にて実見調査を行った。

(2)時間的範囲に関しては、中国では宋代以降「書儀」が新たに生産されることはほとんどなくなり、それ以前の古い書儀も失われていったにもかかわらず、朝鮮半島で15世紀に重刊された『五杉練若新学備用』に着目し検討を進めた。

(3)階層別利用状況と目的に関しては、各書儀の性質や役割・機能について、受容者層の問題と絡めて考察した。禅僧に向けて編まれた『五杉練若新学備用』と、その他の書儀との共通点・相違点を整理し、分析を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく以下の2点にまとめられる。

(1)漢文手紙文書(私信)の書式に関する成果

私信における各種書式の運用実態と時代・地域ごとの変容の解明につとめた。書儀には家書のように純粋な私信から、公文書の影響を強く受けるものまでさまざまな書式が示されている。また、書儀に記述が見られない場合でも、同時代の複数の書簡の実物に共通点を見出すことができる。現存の書儀に収録されているものがすべてではなく、当時用いられていた漢文手紙文書の書式は書儀よりも多様であった。また、敦煌写本書儀と司馬光『書儀』の間の空白を埋め、各書儀の性格や継承関係を浮かび上がらせることができた。

書簡冒頭の「某啓」を特徴とする書式、謁見を求める際や上奏・啓事のために用いられる「牒

子」、贈り物に添えられる「献物状」「送物」「遣物書」、唐末以降に見られる「大状」などについて時間軸に沿って検討を進めた。とりわけ「大状」は使用範囲（空間・時間）が広く、先行研究において「公状」と見なされてきた文書の一部が、「大状」あるいは「門状」であることを明らかにし、その書式を復元した意義は大きい。

唐末から五代にかけて出現した「大状」は、宋代以降も私的な交流の場においてさまざまな用途に用いられていた。相手に情報を伝達する方法に基づいて、口頭伝達と書面伝達の大まかに二種類に分けることができ、両者は唐末から宋にかけて併用されていた。

口頭伝達の「大状」は「門状」から派生したもので、吉凶問わず目上の人物を訪問する際に持参された。自身の姓名や用件を簡単に記し、門番などに手渡して取り次ぎを願い、謁見を請うた。具体的な用件は面会時に口頭で相手に直接伝える。初期の門状の使用対象は宰相に限定されていた。時代の流れとともに使用範囲が拡大し、宋代には完全な私信へと性質の変化が確認された。また、門状から派生したと考えられる類似の用途・機能を持つ小状・平状などと比較して違いを明確にし、それぞれ厳密に定義付けた。

訪問時に不在であった場合、どのような対応がなされたのか、門状がどのように処理されたのかについても考察した。相手が不在の場合にも、持参した門状はその訪問先に残される。そして、受け取った側は「封門状回書」「大状頭書」と呼ばれる書状を添えて送り返したことを確認した。

『参天台五台山記』にも各種「門状」が収録されており、成尋のような平安中期の入宋僧らも中国滞在中に徐々に「門状」に関わる礼儀作法を理解し、少なくとも現地の人びととの交流の中では実践していたものと考えられる。

もうひとつ書面伝達の「大状」は謝礼や暇乞い、祝賀などの用件を書き記すもので、吉儀においてのみ使用が確認できる。

いずれの「大状」も書式は公状を応用したものであるが、公的な空間から私的な交流の場へと用途が拡大した。10世紀頃には官人のみならず僧侶らの交流にも幅広く用いられるようになっており、宋代以降も運用され続けたことを明らかにした。

上記の内容は折々に口頭で報告し発信した。最終的には3本の論文にまとめている。

(2) 『五杉練若新学備用』に関する成果

当初の研究計画の通り、駒澤大学図書館に所蔵される朝鮮重刊本『五杉練若新学備用』のテキストの整理作業を進めた。敦煌発見の書儀や司馬光『書儀』など関連資料との比較をしながら考察を加え、注釈・試訳を完成させた。この注釈・試訳は本課題の研究成果を集約したものであるが、さらに精度を高める必要があるため、現時点では全体を公表するには至っていない。注釈の作成作業に取り組む過程で気づいた当時の書式や言語表現に関わる問題については適宜分析を加えた。吉儀全体に関わる凡例を記した「論書題高下」については初歩的な考察の成果をまとめて公表している。

作業を進める途中で、王三慶『中國佛教古佚書五杉練若新學備用研究』（新文豊出版公司 2018）が出版されたため、計画を若干軌道修正している。本書は上下二冊からなり、上冊には研究成果が、下冊は『五杉練若新学備用』に加え、三洞道士朱法滿『要修科儀戒律鈔』卷之十五、十六、司馬光『書儀』十卷および朱子『家禮』卷四の校訂テキストが収録されている。巻中に見られる各種手紙模範文に焦点を当てる本研究とは異なり、仏教的視点から本書の実用書としての価値・役割が議論されており示唆に富む。書評論文「王三慶著『中國佛教古佚書 五杉練若新學備用研究』讀後：兼論書札相關詞語釋義問題」（投稿中）にまとめた。

この書評では、『五杉練若新学備用』に見られる「簽子」が、司馬光『書儀』の「面簽」や大典顯常『尺牘式（尺牘寫式）』（江戸中期）の「紅簽」「藍簽」との関連性を指摘した。『尺牘式』については、明代の尺牘に関する作法を解説したものであり、書儀の日本への直接の影響を示すわけではないが、中国で脈々と受け継がれてきたものが江戸の日本に伝えられていたことは確かである。漢文手紙文化の受容の史的展開を示す例として位置づけられるのではないかと思われる。

加えて、大典顯常が禅僧であったことも注目される。禅僧・心之が編んだ『五杉練若新学備用』はいままでもなく、敦煌発見の書儀や手紙の中にも禅僧に関わる資料が比較的多く見られる。「版本が諸家に所蔵されているから、仏教界はもとより、文芸家・文人達にもよく利用されたと推測される」（三保忠夫『尺牘資料における助数詞の研究』武蔵野書院，2019，199頁）との見解が示されている。禅僧が書儀の普及・受容において果たした役割については、今後さらに検討を進めるべき課題となろう。

「腰封」という封緘方法については、『五杉練若新学備用』以外の資料には見られない用語である。その具体的なかたちについては、十分な資料が揃っておらず、現時点で復元することはできていないが、日本に見られる封緘方法が手がかりとなるのではないかと考えている。

2018年度は、『中國佛教古佚書五杉練若新學備用研究』の著者である国立成功大学名誉教授・王三慶先生をお招きし、意見交換を行い、それぞれの関心の所在や問題意識、最新状況の共有を行うことができた。また、所属先（関西大学東西学術研究所【非典籍出土資料研究班】）との共催で、『五杉練若新学備用』研究をテーマとして、研究例会を開催した。王先生には「五杉集對儒釋凶禮的受容」の題目でご講演いただいた。併せて「唐宋時代の門状 使用範囲の拡大と細分化」という研究発表を行った。

(3) その他の関連する成果

そのほか関連する研究活動として、最終年度である2020年度は公益財団法人日台交流協会共同研究助成事業(人文・社会科学分野)「仏教における学問的理論と実践的知識 東アジアの仏教に見る実用書の伝播と収蔵」(研究代表者:楊明璋)に分担者として参画した。共同研究では9世紀から14世紀の東アジア地域の仏教界における実用書の役割について、代表者・分担者がそれぞれに個別の事象・文献を通して、特に教理の理解や各種儀式の実践といった実用的効果、ひいては宗教における意義を明らかにした。その上で、全体として、中国・日本・朝鮮半島における仏教実用書の受容と展開について再検討した。この共同研究を通して得られた知見は、本研究課題に対しても新たな視点や方向性を与えるものとなり、書儀を含む中国の文化が周辺諸地域にいかにか普及し、いかにか受容されたかという問題について議論を進めることができた。書儀の果たした役割について研究を進める上で、時代や地域を限定せず、書儀だけでなく「応用文」に分類される各種実用書なども視野に入れつつ、後世の関連文献を参照していくことが有効であるとの考えに至った。これを踏まえつつ、本研究課題の成果を集約し、公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 14
2. 論文標題 《（擬）刺史書儀》 封門状回書 與《五杉練若新學備用》 大状頭書 之比較研究 唐宋時代の門状 使用範圍の擴大と細分化 補遺	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 敦煌寫本研究年報	6. 最初と最後の頁 85 - 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 0
2. 論文標題 唐宋時代の門状 使用範圍の拡大と細分化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 続中国周辺地域における非典籍出土資料の研究	6. 最初と最後の頁 65 - 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 35
2. 論文標題 敦煌的「獻物状」、「送物」及「遺物書」析論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 敦煌學	6. 最初と最後の頁 19 - 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 13
2. 論文標題 書儀に見られる「【片旁】子」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『敦煌寫本研究年報』	6. 最初と最後の頁 277 - 288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 51
2. 論文標題 『五杉練若新学備用』巻中「論書題高下」小考 試訳と内容・表現に関する初歩的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『関西大学東西学術研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 85～96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 12
2. 論文標題 唐五代期の私信冒頭に見える「某啓」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 101 - 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本孝子	4. 巻 15
2. 論文標題 大状の諸相 唐末から宋における私信としての展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 敦煌寫本研究年報	6. 最初と最後の頁 51 - 65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 敦煌書儀・書簡文の整理と研究展望 用語集成の構築に向けて
3. 学会等名 国際ワークショップ『敦煌寫本の諸相』（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 《(擬)刺史書儀》 封門状回書 與《五杉練若新學備用》 大状頭書 之比較研究
3. 学会等名 漢學與東亞文化國際學術研討會 (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takako YAMAMOTO
2. 発表標題 How to Write a Letter of Presenting Gifts: Notes on Transmittal Letter Texts from Dunhuang
3. 学会等名 Dunhuang Studies Conference, Cambridge 2019 (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 淺談書儀中的【片旁】子
3. 学会等名 2018敦煌論壇：敦煌與東西方文化的交融國際學術研討會 (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 書儀に見られる「【片旁】子」
3. 学会等名 中日敦煌写本文献學術研討會 (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 日本学者研究中国西北出土文献取得的成績
3. 学会等名 「學術月系列講座之三」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 近十年来日本学者漢文写本研究概況
3. 学会等名 「學術月系列講座之五」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 唐末五代から宋における漢文手紙文書の書式の變遷 P.3449+P.3864「(擬)刺史書儀」の検討を通じて
3. 学会等名 第62回國際東方學者會議(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 書儀蘊含的礼法思想試探
3. 学会等名 敦煌吐魯番法制文献与唐代律令秩序學術研討会(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本孝子
2. 発表標題 近年来日本学者的写本研究動態概述
3. 学会等名 国家社科基金重大項目5-11世紀中国文学写本整理、編年与綜合研究項目推動会第二屆写本学論壇
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------